

漢法苞徳塾資料	No. 088
区分	医学史(15期入門講座)
タイトル	古典について I (黄帝内経と難経～難経の角度から見て)
著者	八木素萌
作成日	1995.11.05

1. はじめに

塾としては、『塾の5項目の趣意』を実現して行くためには、是非とも理解して置かなければならないと思われる基本的な医学書があると考えている。つまり、そのような医学書と言うのは、漢法医学の重要な古典の中でも特に基礎的なもの、古典中の古典、基本中の基本と見られる医学書である。その点については『塾の趣意』説明の中で触れているので、今回の入門講座では、極く簡単にそれらについて紹介しておこうと考える。

『黄帝内経』が、何時ごろ誰の手によって書かれ、何を書いている書物であり、最良のテキストと目されているものはどれであり、どんな研究書や注釈書があるのか、近年のもので都合の良い書物はどれか等と言うことに、触れて行くだけで予定されている時間が経ってしまうので別紙を参考にしておくことにして、いきなり本題に入っていくことにする。

2. 漢法医学の基底としての黄帝内経

『黄帝内経』は『素問』と『靈枢』の2部から成っており、ともに81篇に記述されていること、現存する最良のテキストと目されているものは、先年、日本経絡学会が「20回学術大会」の「記念事業」として「復刻」出版されている。

秦漢の頃に複数年掛けて叙述されているので、当時の医学の代表的なグループの学説を、「黄帝」と学者（医者・当時の主要な医学的グループの代表的な）との問答の形式で、記述しているもの、つまり、別の角度から言えば、6派の学説の医学ダイジェストとも言える書物である。（『内経』は黄帝と岐伯始め雷公・少師・伯高・少俞・鬼臾区など六師との問答の形式で叙述されている）。『素問』は基礎医学的なものを主に叙述しており、『靈枢』は鍼灸医学の教科書的なものとして作られている、などは常識的に知られていると言えましょう。

漢法医学は『黄帝内経』の基礎の上に成立し、その路線から逸れることなく発展して来ているものであるとされている。それには「陰陽五行」論の論理が貫かれているものである事なども、常識的に知られている事と言って良いでしょう。

現在は、あらゆる学問分野において「パラダイムシフト」が意識され、また、語られています、医学も極めて大きな転換期に立ち至っていると言われていています。しかし、その展望は、まだハッキリとは見えてきてはいません。現代医学には、「遺伝子治療・臓器移植・マイクロマシンによる体内手術」を展望する傾向と、「免疫応答と心身医学・ストレス」への対処の発達を展望する傾向とが、

極めて複雑で分かりにくい——絡み合った姿で現われているように見えます。私には「遺伝子治療・体内手術」傾向と「ストレス・免疫」医学傾向と、分極して行くのかもしれないと思えるほどに、思想的な質が違うように見えます。

現在の「中医学」では、最近はあまり言わなくなっているようですが、少し前までは、盛んに中国は「中西合作」医学と言う事を言っていました。極く最近入ってきている「中医学書」の「臨床書」とも言える系譜のものから、中医学の体裁を装った後進国的現代医学（西医）——「西医」に呑み込まれつつある中医学——の傾向が強まっているような印象を受けます。それで、「台湾」系と「本土」系には内容的に見て、隔たりが大きくなっているのではないのか、と思えるのです。もしかしたら、此处にも分極の傾向を見て取れるのではなかろうか？と思えるのです。

2つの医学に見られる「分極」傾向の検討は、この講座の主題ではないので、問題性の指摘のみに留めて、主題に戻ります。しかし、少なくとも、次のような点については言うべき事は許されるのではないのでしょうか？ 2000年以上の臨床蓄積と理論的發展を遂げている医学が、たかだか300年程度の蓄積と発展しか持っていない医学に包摂されて補助的な存在でしか無いようなものになってしまう、等と言う事が、どうして展望できるのでしょうか？と。

『黄帝内経』の強固な土台のうえに、「湯液」と「鍼灸」と「按蹻」の3系譜の臨床医術が築かれて来ました。最近では（1982年以降）「気功」も数えられています。極く簡単に「図示」しますと…、

『黄帝内経』 → 「素問」 → 「靈樞」 → 「難経」 → 「鍼灸聚英」 →
→ 「鍼灸資生経」 → 「鍼灸大成」 → …… 『鍼灸医学』

『黄帝内経』 → 「素問」 → …?? → 「傷寒・金匱」 → …??… →
↳ 神農本草経 →

→ 「温病論」 → …… 『湯液医学』

のように描けるでしょう。

3. 医学史上の『難経』と『傷寒論』の位置

「湯液家」にとってのバイブルとも言われている『傷寒論』に、はかなりの分量で「鍼灸治療」が記述されている。『難経』には「湯液」治療の記述はゼロであるが、いくつかの「難」の治療原理論的な記述や・病状判断論的な記述は、「湯液」的治療にも非常に有効な医学理論と言う側面が見られる。例えば、「李東垣」の著書には『難経』の影響が色濃く現われている。また、『医方集解』（清・汪昂 字訊庵）の中の処方解説やその双行注には薬と経脈の関係に関する記述が多い。

近年「八綱弁証」は『傷寒論』の功績であると言われているが、『鍼灸治療』の際にも、「八綱弁証」を軸とした診察の大切さが称えられている。また『鍼方六集』（明・呉崑）には「奇経八脈」の八宗穴の基本的な配合——〈公孫・内関、臨泣・外関、後谿・申脈、列缺・照海〉の4通りのセット配穴——が例えば瀉心湯・承気湯・涼膈散・通経湯・大小柴胡湯・桂枝湯・葛根湯・大小青竜湯・二冬湯・犀角薄荷湯・甘草桔梗湯、その他のよく知られた重要処方の効果になぞらえて論じて

いる記述が見られる。また『傷寒類証活人書』（宋・朱肱）では『傷寒論』の「三陰三陽」記述を明らかに「経脈」論の問題として把握している。『温病学』にも「両書」の濃厚な蔭が見られる。

上のように極く大雑把に眺めても、「鍼灸家」にとっての『難経』は、「湯液家」にとっての『傷寒論』にも匹敵する重みがある書であるが、両書は後代の医学に複雑に絡みあいながら、深刻に影響し続けてきている事が判かるものである。

4. 『難経』の達成とされるもの

『難経』の所論を『黄帝内经』に記述と照らし合わせながら、『難経』について注釈しているものとして著名な『難経経釈』（清・徐大椿）に記述を参考にして、『難経』の達成とされるものを、ざっと見てみよう。

- (a) 「寸口脈診の確立」…『黄帝内经』には、「上・中・下の三部をそれぞれ三候に診る「三部九候診」と「脈口診」と「人迎・気口診」と言う三種類の方法が記述されている。『靈枢』は「人迎・気口診」のみである。『難経』は約 12000 字余りの記述であるが、この内ほぼ 6000 字に及ぶ「難」を費やして「脈診」を論じている。つまり、「寸口脈診の確立」を行なっている。『傷寒論』平脈法の「脈診」記述を見ると、用語はかなり異なっているが、足での「先天」「後天」「風気」を診る脈診記述を除くと、『難経』脈診に非常に近いものである事が判る。『史記』で「史馬遷」が「脈は扁鵲に始まる」と書いているが、この場合の「扁鵲」は「盧扁」、つまり『難経』の著者のことのようにである。手の撓骨頸状突起部で脈診する手法が『難経』の創始であるとされている。
- (b) 気候の三陰三陽の循環が人の生理に影響する事が、(季節の脈として)脈にも現われているものである事を明快に記述している。つまり、『素問』の記述よりもさらに具体的に臨床的なものとしている（7 難）。そのほか季節の脈（四季）の過・不及と病情と、そして、その病の内外（15 難）の指摘や、「死の脈」状の原理・所謂「胃の気」脈の本態を記述。
- (c) 菽法の確立明示。（5 難）
- (d) 病の内外とその治療原則（12 難・58 難・74 難・75 難ほか）の提示で『内经』の記述をズット明快にしている。「心・肺→外」「肝・腎→内」の図式。
- (e) 病証と脈象の対比で予後を占うこと。上工・中工・下工の区分に診察力の相違を挙げていること。（13 難）
- (f) 治療のための病の判断、その大過・不及の判断の重要点と、配穴原理の提示（16 難・68 難・72 難・74 難・75 難・81 難ほか）。陰陽の旺相など。
- (g) 五臓の虚病の治療方法原理の提示（14 難）
- (h) 奇経論の確立と絡脈論の土台の建設。
- (i) 病因診断論の明確化（13 難・48 難・49 難・58 難）

(j) 五臓の五行・季節の五行・経脈、経穴の五行・病因の五行・要穴の五行などの相互的に極めて密接な、しかも、立体的な連関構造を強力に提示した。

(k) 剛柔論の基礎の確立～後代には発展して明確になる。

(l) 「虚実論」「補瀉論」の明快化。

その他。

『黄帝内经』の記述と『難経』の記述を比較対照しながら研究することは、まだ不十分であるので、丹念に検討しなければならないと思われる。『難経』を研究することによって『内经』の所論がより明快到理解できるものであり、また良く『内经』を咀嚼することによって『難経』がより深く理解できる、と言う趣意の論を聞く事が少なくないが、後代の重要な医学書の記述を見る事によっても、つまり、臨床的な蓄積と深く関連しているものとの対照が、より深く『黄帝内经』→『難経』→『傷寒論』→『温病学』と連綿と受け継がれている医学の、核心的な枢要点が把握できるのではあるまいか？

5. 結語

高田 淳が『易のはなし』（岩波新書）の中で、近代の名だたる学者たちの『易』に関する理解を紹介している～ニーダム、グラネ、ライプニッツ、カプラ、ニールス、ボーア、ユング、王船山など～。この本の中で、彼(高田 淳)は、「絶対的な唯一神の秩序と因果律に支配される合理主義的世界像」に根ざしている西欧的な文明の目から、全く異質な世界と文明の核心を主張し表現しているものとしての『易』を逆照射する、と言う手法で、現代文明になじんだ精神に『易』を紹介したのである。従ってそれは極めて思想的な書となっている。

ユングは「…科学は西洋精神の道具であり、それを放棄することはできないが、科学による理解が唯一のものであると主張するとき、たちまちその洞察はくもらされる。精神的なもの、生命的なものに対する洞察は、大地の法則に従うときにのみ自由となる。大地に根を下ろした中国的思考は…」と把握したと高田は書いている。

「…陰陽五行説と通常一括していわれる思考に対し、陰陽論と五行説とは歴史的にも別々のものであると指摘しているのは当然の事であるが、ニーダムはさらに、それらはいずれも単に陰と陽または水火木金土に類別する配当理論であるよりは、具体的事物の認識の仕方であることに注意を促す…」

「…西欧の科学史家としてのニーダムが、ギリシャの元素説と五行説との関係について、多少の相似性があるとしても、むしろ相違をこそ強調すべきであるとして、単一文化の伝播論よりも文明発生の多元論をとるのは、中国文明の異質性を前提とするからである。…」

「…従来の西欧の研究者が五行をエレメント element と訳してきたことについて、本来運動を意味する行とは、行く、めぐるという意味の訳語としてはふさわしくないという。五行説は、事物の基本的性質を暫定的に分類しようとする努力であった。五行説の行とは元来運動を意味しており、

永遠の循環運動を行なう5つの強力な力をいい、…ニーダムは、水火木金土という物質の具体的相互転換のことを語っているのであって…ニーダムはそこに、五行相生説〈木火土金水〉や相勝説〈木金火水土〉の他に、宇宙発生の順序〈水火木金土〉や現代の順序〈金木水火土〉など、列挙の順序を示しているが、問題は運動の仕方である。あるものが他のものに作用しそれを滅ぼすことによって、自らも変化しまたは滅亡するという変化、そしてこの変化の過程がより多くの基質を生成する他の過程によって遮蔽されるという構造である。五行説についてニーダムは、無機物と有機物を含む世界の変化のサイクル、動物と植物の生態学、生命の化学の一般原理と生体組織の反応速度など、現代科学の到達したレベルにおいて論じている。五行による配当論はいうまでもなく存在するわけだが、ニーダムはそのことよりも、5種の基本的過程、すなわち物質の本体ではなく、それぞれの関係に執着するところに中国思想の特徴があると主張する。…」

(八木注～「あるものが他のものに作用しそれを滅ぼすことによって、自らも変化しまたは滅亡する…」の部分は、相生・相剋の所がこのように訳されたのであろう。)

「…ニーダムの有機体の哲学、カプラの相補性、あるいはグラネのいう秩序・調和の全一性の概念を…」などなどと高田は紹介する。

いずれにせよ、近代西欧の著名な思想は「…西欧が中国の易をどのように認識するかという問題に直面したとき、同時に西欧は己れの文化の普遍性を問われた。それはまた、近代中国が西欧世界に出会い、己れの文化をどのように自己認識すべきかという問題に際会したとき、易の世界から再構築を迫られたことに相応する。…」と高田が述べているように自覚しないわけには行かなかったであろう。

医学にもまた、同様のことが生起している。東西の両つの医学に自己の再構築を迫っているのが、医学における「パラダイムシフト」の問題であろう。

我々の側から、この「パラダイムシフト」問題の解決に資すると言うことは、自らに課せられている主題を着実に遂行して行くと言うことであろう。東洋医学の側にいるものとして、我々に課せられている自らの「再構築」の主題を明確にしつつ、その主題に取り組んで行こうではないか？

『靈枢』九鍼十二原第1の冒頭の「…民衆に手術や毒薬をのむなどの苦痛をもたらすことなく、病苦から救うために鍼灸を薦めたい…」と言った黄帝の認識は、われわれの少なからぬ経験でも確認されたのではあるまいか？しかし、大勢の臨床家がそのような実績を蓄積して行けるようにも、また、いつでも、大多数の臨床家によって「黄帝が言うような治療」が実現できる技量と制度とを獲得しているとも、言うことができないのが実情と言わなければなるまい。このようなギャップを埋めて行くための課題を、着実にクリアーして行かなければならないと思う。

現代西欧的医学が「不治の病」として烙印しているものに、われわれが対処する場合には、まさしく漢法医学的に診断し漢法医学的に治療方針を樹て、そして、漢法医学の治療論と治療技術を駆使して取り組んでこそ、良い臨床成績が挙げられるものであることを、我々は体験的に認識している、この点をおおいに強調しなければならないと思うのである。

故に、東洋医学の理論と方法とを、より強力に構築し展開して行くことが大切であるが、それが西欧的近代社会に理解されるように推進されるために、臨床的成功の大量な蓄積と、その実績を現代的な常識や感覚にも理解できる形式で説明すること、そのためにも、西欧的近代医学の達成を正確に理解するとともに、その、理論的・方法論的な根底をも十分に理解する必要も避けられないのだと、意識するのである。

以上